

〈ジュニア小説〉作家・佐伯千秋の〈真実〉

文化創造専攻 国文学領域

一七〇〇二CJM富 中 佑 輔

修士論文要旨

一九五〇年代から一九七〇年代にかけて、少女小説の分野で活躍した作家・佐伯千秋についての研究をまとめた。佐伯千秋は、活躍の場が主として十代の読者を対象とした大衆的な小説雑誌とその周辺出版物であったために、これまで、文学研究の対象とは、ほとんど見なされてこなかった。しかし、様々な資料からは、佐伯千秋が一九五〇年代半ばから一九七〇年代にかけて、人気作家であったことが窺い知られる。本論文は、少女小説家であった佐伯千秋が、現在では忘れ去られた存在ながら、当時独自の〈ジュニア小説〉という理想の創作を目指していたという観点から、彼女の〈真実〉を考察したものである。

第一章では、伝記的な事実を踏まえながら、佐伯千秋という作家が形成される過程を明らかにした。第一節ではまず佐伯千秋の伝記的な事実を、精緻に、かつ詳細に検討し、佐伯のより正確な文学的生涯を明らかにした。これまでは佐伯自身による自伝的記述のみに注目が集まるといふ傾向が強かったが、本論文では、義兄・浜井信三の著書

『原爆市長』（一九六七年）をはじめとして、佐伯の通っていた日本女子大卒業生による戦時勤労動員を振り返った私家版手記集『戦いの中の青春』（一九七五年）などの周辺資料を用いて、佐伯千秋という作家が、いかにして作家の道を歩み始めたのかを明確にした。第二節では、佐伯千秋の創作の原点が、故郷・広島に原子爆弾が投下され、両親をはじめ親族や多くの友人たちを喪った経験の中にあつたことに鑑み、原爆死した従姉・照子がモデルである『燃えよ黄の花』（一九五八年）を扱った。第一節で明らかとなった伝記的な事実を踏まえつつ、この作品からは、娘を大切にしていた両親を残し、勤労動員のために広島から再上京した佐伯の後悔が読み取れると指摘した。

第二章では、佐伯千秋が当時の若者が使用していたカジュアルな口語表現を取り入れていたことと、三人称で作品を執筆していた佐伯が一九七〇年代に入ってから一人称で長編小説を執筆し始めたことに着目。一九七〇年代に彼女が目指した〈ジュニア小説〉の性質について考察している。前者に関しては新資料「現代っ子の言葉」（『こどもの暮し』第1号、学習塾「青桐学園」内『こどもの暮し』編集部、一九七五年）を手掛かりとし、後者に関してはエミール・バンヴェニスト「代名詞の性質」（『一般言語学の諸問題』（岸本通夫監訳）、一九八三年）を中心に諸種の語り論を援用して、テクスト論的観点から論じた。

第三章では、今後の佐伯千秋研究に関する課題をいくつか述べている。